
跡取り物語

¥(^0^)/EX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

跡取り物語

【Nコード】

N4173H

【作者名】

¥ (^O^)/EX

【あらすじ】

名門ランスロット家の跡取りをかけて13組の子供たちがチェス勝負を行うことに。ところがその駒は本物の人間で…？

ACT 0

宵も更けた庭の真ん中で、夜空を見上げた。

視界に入るのは満天の星空だけで、ふとした拍子に逆さまになってしまいうさだた。

今日は年に一度だけの星が最も輝く日。別名『星屑の外灯』と呼ばれる星空。

耳が取れそうとまではいかないまでも流石にこの季節は息が白くなる。

手をこすり合わせて首を竦めるとそつとポケットに手をつ込んだ。かざりと指先に当たる紙の感触。

先ほど食事で使ったナプキンを、そのまま持ってきてしまったらしい。

何でもかんでもポケットに入れる癖を何とかしると、幼い弟分が言っていたのを思い出す。

手を伸ばせば触れそうな星屑をぼんやり目で追っていると、草を踏む音。

「すまない、待たせた。」

つい先ほど頭の中で自分を叱った顔が、息を弾ませて現れた。

子供にしては少々大人びた声は、昔一度だけ見た歌劇に出てくる麗人のそれに近い。

まるで王間の絨毯でも歩む王子のように、その足取りは揺るぎなく、堂々としている。

草の絨毯を踏み王座に現れた小さな王は、月明かりの下、綺麗な白

頬を赤く染めていた。

僕は壁につけていた背を浮かせて微笑む。

「うっん、今来たところ。」

そう言う途端に彼は不機嫌そうに顔を歪ませる。つかつかと歩いてくると、上目で睨まれた。

「うそをつけ」

鼻が真っ赤だ、と言って小さな体を精一杯伸ばして僕の鼻を摘む少年に思わず笑ってしまう。

「ごめんごめん…それより、ほら」

そろそろ離して、と小さな手をとって視線を合わせるように屈むと、再び口をへに曲げる王。

「それより、とはなんだ。僕はまじめに言っているのだよ。それに手だってこんなに冷たい…」

「うんそうだね。じゃあ冷たくならないよう手をつなごうか。」

そう言って説教モードに入りかけた頭を撫でてやると、むうとむくれられてしまう。

「困ったな…どうしたら機嫌を直してくれるんだい？」

「別に不機嫌などではない。」

ぷいと可愛い顔を背ける弟分は完全にへそを曲げてしまったようだ。

「仕方ないな」

ご機嫌を直してもらわなければ、せつかくの夜が台無しだ。

僕は握っていた手を一旦離すと腰につけていた鞆を無造作にバックルから外した。

「何の真似だ」

不機嫌を隠しもしない声に苦笑を一つ。

機嫌が悪くなった彼を宥めるには相場決まって下手に回るしかないのである。

しかし媚びてはいけない。彼は媚びることを嫌悪するからだ。そこで下手に回り、尚且つ媚のない屈服の証を示すには。

アッシュグレイの小さな王の前に一歩進みでる。

おもむろに片膝をつくど、鞘に入った短剣を横にして、主君に捧げるような格好をとった。

「我が名はキアラン・リジー。エルロット・ジゼルに騎士の誓いを捧げる者なり。」

エルロット・ジゼルには我が剣を受け取り、賜れん事を。さすれば

「……」

「その道が茨の道であるならば、私はそれを切り裂く剣となろう。その道が闇に閉ざされているならば、私はそれを払う剣となろう」

聖騎士が王にやるような騎士の誓いを口にしながら、不思議と胸が高鳴っていくのが分かった。

小さなご主人様は最初は腕を組んでそっぽを向いていたが、フツと笑うと僕の捧げた剣をとる。

そして、抱えるようにして鞘から抜いたダガーを僕の肩にのせて首筋近くに置いた。

「何を約束する？」

「勝利を約束する」

「何を懸ける？」

「我が血肉と魂を懸ける」

「何を誓う？」

「希望に溢れる未来をキミに」

「……………エルロット＝ジゼルはキアラン＝リジールの誓いを確かに受け取った。

僕は君を信頼する。剣の誓いが果たされるなら、僕はこの身に変えても君に報いるだろう」

流石に貴族だけあって、騎士の誓いに対する返礼をエルロットは知っている。

言葉を告げると、再び短剣を鞘に戻して、僕の前に差し出した。

「キアラン＝リジール。誓約の剣を君に」

「はっ。宝剣ありがたく頂戴いたします」

頭を下げながら、主君の捧げ物たる剣を受け取る。

剣を受け取ると、ゆっくりと立ち上がってエルロットと見つめ合った。

そしてしばらくすると 同時に噴出したのだった。

どうやら機嫌は直ったらしい。

護身用の短剣と草の絨毯、石の王座でも、彼の支配欲は満たされたようだ。

すっかり笑顔になったエルロットの髪をそつと撫でるとくすぐったそうに身を振る。

「エルは本当に騎士の誓いが好きなんだね。」

「む、何だその言い方は。」

「いや。機嫌が直ったようで何より。」
「だから最初から不機嫌などではない。」
それでも今度はちゃんと顔を見て話せているのだから、子供というのは現金な生き物である。
「それで？騎士殿はこんな夜更けに主君を呼び出して何のようなかね。」
偉そうな物言いは彼の小さな体に不揃いだが、不思議と悪くない。
アッシュグレイの髪をかきあげ、藤色の瞳でこちらを見る姿は本当に王様のようである。

「そうだね…少し移動しようか。」
「む？何かあるのか。」
「それは着いてからのお楽しみ。」
幸い今日は年に一度の大規模な星月夜。明かりがなくとも十分歩ける明るさだ。
歩き出そうとしてふと思い出す。少し冷えつつある小さな手をとって、暖めるように包み込んだ。
「マイマスター。足元が暗くなって危のうございます。このキアラが主をエスコートしても？」
「ふん、良かろう。せいぜい僕を満足させることだ。」
手を握られ、瞠目したエルロットだったが、意図に気付いたのか、わざとらしく横柄に言い放つ。
その言葉を聴くと、こちらも白々しいほど恭しく「イエス、マスター」と言って手を引いた。

少し歩いた先にそこはあった。
御詠え向きに突き出た崖の上に作られた広大に登れば、見渡す限りの海がある。

普段は真つ暗なその世界も、今は海面に宝石を散りばめた様に輝いていた。

「すごい…」

呆然とその様子に見蕩れている横顔にそつと笑みをかみ締める。

ああ、やはり連れて来てよかった。

夜風が優しく少年の髪を撫で、その姿は切り取られた絵画のような輝きがあった。

「去年の『星屑の外灯』の日、偶然見つけてね。エルにも見せてあげようと思って。」

お気に召した？と、隣のエルロットを見れば、彼は嬉しそうにはにかんだ。

「ああ、とても…綺麗だ」

そう言うて何処か夢心地につぶやく表情は、本当に感動しているときの彼の癖。

僕は密かにその表情を気に入っていた。

その表情をしているときだけは、彼が普通の子供に戻っているから。

「エル…」

「何だろうか」

僕の呼びかけにも、まだぼんやりしている彼の手をそつと握りなおす。

ふと彼を盗み見ると、地平線に写る光に溶けるような姿があまりに夢げで。

「少し、冷えてきたね。」

何となく不安になって、脆くて細い小さな体を、暖を取るふりをし
て抱きしめた。

「僕は君の湯たんぽではないのだが」

「まあまあ。エルもあつたかくなれるし良いじゃないか。」

呆れたようにため息を疲れたものの、振り解かれないのは機嫌が
いい証拠か。

「来年も」

「ん？」

「来年も…また来よう。」

二人して座り込んで、寶石箱みたいな世界を眺めよう。

来年は毛布を用意して、そつだ、温かいスープをポットに入れてこ
ようか。

きつと今よりこの景色を楽しめるよ。

だから、どうか

「約束。来年もまた見に来ようね。」

来年も無事、この日が巡ってきますように。

祈りを込めて、彼をさらにきつく抱きしめる。
そんな僕の様子に何を感じたのか、エルは困ったように微笑むと

「そう思うのなら、来年もちゃんと僕をエスコートすることだ。ナ
イトくん？」

希望に溢れる未来をキミに

なんだろう？

誓いはちゃんと果たしたまえ。

そう言って高慢に微笑む王に騎士は再び頭を垂れた。

ACT 1 第一手

使用人の朝は早い。

夜明けと同時に目を覚まし、いつ主と顔を合わせても失礼の無いようまず顔を洗い身形を整える。衣服は晩に眠る前、皺にならぬよう伸ばしておき、皺が寄っていたなら水ノリを吹きかけた上でアイロンをかけて伸ばしておく。

特に執事ハトラともなれば、品性も求められる。常に完璧な身だしなみと紳士的な振る舞い。

エミリオ「ロッターも、幼いながらに執事を務めていた。油気のない亜麻色の髪は、相手が鬱陶しく思わないよう短く整えられ、前髪も短く、形のいい額が見えている。愛用の眼鏡はしっかりと磨かれており、涼やかな金の瞳も相成って体格こそ小柄だが、まさしく『優秀な執事』という印象の容姿である。

もちろん執事に老いも若いも例外なく、エミリオも夜明けと同時に目を覚まし、身形を整え、いつ如何なるときも主の要望に応えるため、万全の準備を行う。

顔を洗い、シャツにズボン、ネクタイに燕尾服。

それらに皺や汚れのないことを確認してから身に纏うと、厨房に足を向ける。

釜戸に火を起こし、湯を沸かす間に今日使う食器類を磨いてしまう。

「ふわあ〜…おはよおございま〜す…。」
そうこうしている間に他の使用人たちも起きてくる。
欠伸をかみ殺しながら厨房に入ってきたのは、エミリオと同じ位の背の、愛らしい人物。

絹糸のように艶やかな髪は亜麻色なのだが、惜しいことに肩にかからない長さで切り揃えられてしまっている。くるくると表情の変わる瞳を縁取る睫は長く、量が多い。
群青色のスカートと、白の前掛けを身につけ、右手に純白のヘッドドレスを持っている。

浮かべる表情や言動から受ける印象こそ正反対なもの、その顔立ちが鏡に映したようにエミリオとそっくりな、この屋敷の侍女^{メイド}。

侍女の名前はアルシオ「ロッター」。

森羅万象、それこそ全世界の人間どころか動植物、微生物、細菌類、果ては未確認宇宙生物にまで否定されようが、エミリオの双子の“弟”である。

「ああ、おはようアルシオ。」

「ぶう〜。エミリオ毎朝毎朝早すぎだよあ〜〜。」

「たまたまだよ。それよりほら、寝癖を直しておいで。」

膨れっ面をする侍女にエミリオが苦笑しながら促すと、アルシオは髪を撫でながら、ぶつぶつ呟きつつ洗面所に向かった。

「ぶう〜ぶう〜。毎晩ちゃんと梳かしているはずなのに、何でこんなになるかなあ〜。」

洗面所からの不機嫌そうな声に重なって、湯が沸騰した音が厨房に響く。

エミリオたちが使えるのは王家の後ろ盾、名門ランスロット家。7年前に終結した『賢武』戦争と呼ばれる大規模な戦乱の影響で、多くの貴族が没落していった中、栄華を極めた様は、まさに奇跡だった。

『賢武』戦争の『賢』とは、その強い魔の力から恐れられ、迫害を受けた『魔法使い』。

また、『賢武』の『武』は呼んで字の如く武力によって彼らを虐殺していった『王家』。

つまり、『魔力』対『武力』のぶつかり合いである。

ただ魔法が使えるだけで、虐げられてきた、『魔法使い』たちの怒りが百年以上も続く『賢武』の争いの引き金を引いたのだそうだ。

その争いに巻き込まれたのは王族だけではない。

王族の後ろ盾をする貴族たちもまた巻き込まれ、中には戦陣に送られるものもいた。

ランスロット家もまた例外ではなく、前当主、またさらに前の当主たちも剣を振るった。

多くのものを巻き込み、たくさんの命が散った『賢武』の戦いを終わらせたのは、現当主。

現在ランスロット家当主で在らせられるシュドナイ＝ランスロット

は、歴代当主の中でも群を抜いて優秀、かつ残忍な男と言われている。

冷淡にして、冷酷。

しかし、そんな情のない男だからこそ、あの百年にも及ぶ『賢武』の争いを終わらせられたのだと、誰もが口を揃えて言った。

たかが一貴族に過ぎないランスロット家が、なぜ戦乱の世になって、力を得て行ったか。

それはランスロット家にとっての社交の場は戦陣だからである。

他の貴族が、絢爛豪華な室内で、煌びやかな衣装を身に纏い、オーケストラの演奏に乗ってウイナワルツを踊ることを社交と言うのなら。

ランスロット家にとっては、荒野流転の戦場で、血や泥で汚れた鎧を装備し、銃声と雄叫びを耳にしながら剣を振るうことが社交なのである。

圧倒的な武力と、魔法の才。

それがランスロット家が栄えた理由であり、かつ王族内での強い影響力を得た理由である。

一通り食器を磨き終わると朝の紅茶の支度を始める。

この屋敷の主は寛大で、使用人たちにも自由に紅茶を飲むことを許可している。

そろそろ起きてくるであろう主の分をはじめ、合計三人分の紅茶を注ぐと、やっと納得いくような髪形になったのだらう、どの角度から見ても完璧な美少女侍女になったアルシオが、洗面所からようやく戻ってきた。

「アルシオ、鬱金玉デイナーと砂糖、どっち？」

「ん」と、アルちゃん今朝は鬱金玉よりレモンでストレートな気分。」

「はいはい」

レモンを流れるような仕草で一枚薄切りにすると、紅茶に添える。自分の分のカップには薄く輪切りにした鬱金玉を浮かべて、紅茶に口付ける。

「相変わらず紅茶入れるの上手だよね。料理も上手だけだよ。」
「教えてくれた人が上手いからね。」

そう言つて朝の紅茶を楽しんでいると、見計らつたように小さな鈴の音。

チリンチリン

「あ、御主人様マスターもう起きてたんだ。相変わらず早いね。」

「みたい。じゃ、行つてくるよ」

エミリオはティーセットをトレイに乗せ、厨房を後にした。

この屋敷に住んでいるのはランスロット家第11子息エルロットとその妹君で第12子女フラウリツシュ。

執事であるエミリオはエルロットの周辺の世話を、侍女であるアルシオはフラウリツシュの周辺の世話を仰せつかっている。「といってもアルシオは男だが」

体の弱いフラウリツシュでは夜明けと同時に動き出す使用人たちとはどうしても体内時計が合わない。やっと日が昇ってきたような時間帯に使用人を呼び出すのはエルロットと相場決まっていた。

使用人の生活区域は地下である。

地下とは言っても地下室とは違い、半分地面に埋もれているだけで、窓もあり日の光も入る。喚起もしやすく湿気もたまりにくいので、かなり快適な環境だ。

その地下から石造りの階段を上ると、広い玄関ホールに出る。

こちらは二階まで吹き抜けになっており、豪華な絨毯が敷かれている。

主の寝室は正面階段を上った先の二階にある。

にも関わらずエミリオは奥の階段に続く廊下を迷うことなく進んだ。その階段を上った先にあるのは執務室と物置部屋だけである。

本来なら、おやと首を傾げるところだが、何のことはない。

この屋敷の主が紅茶を所望するときは、相場決まって書斎か執務室にいるからだ。

そして書斎は一階にあるが、先ほどの鈴の音はもっと遠かった。

執務室の扉の前に立ってドアを軽くノックする。

「お呼びでしょうか」

ノックしてすぐに入るなどと言う無粋な真似はしない。主から許可があるまでは、扉の前に佇むのが執事というものである。

やがて静かに入室を許可する声が聞こえ、木の葉の装飾が彫られた

真鍮製のドアノブを捻る。

「失礼します。」

室内に入って真つ先目に目に入ってくる机。そこに座り羽ペンを動かす人物。

先ほど銀の鈴でエミリオを呼んだ張本人がそこにいた。

「…君か」

書類に目を通していた青年が顔を上げてエミリオに目を向ける。

ガラス細工のように端整な線の細い顔立ち、陶器のように滑らかな白い肌に、アッシュグレイの髪と小さめの縁なし眼鏡を通してエミリオを映す切れ長なアメジストの瞳。

漆黒のウエストコートに、深い鈍色のスーツ、胸元のクラヴァットに付いた小夜啼鳥ナイトンゲルのピンがやたらと似合ってる。

触れれば切れる、刃のように張り詰めた雰囲気の青年だった。

青年の名はエルロット。エミリオとアルシオの雇い主でありこの屋敷の主である。

「用意がいいな」

艶があるのに涼やかな良く通る声。だが、凜としたそれを嫌うかのように端的な言葉。

エミリオがサイドテーブルに紅茶を並べ始めると、エルロットはかけていたノンフレームの眼鏡を外すと、ペン置きの傍らに置いた。

紅茶を並べ終えたエミリオがなんと無しに机の上に目を向けると、火の消えたランタンが置いてあることに気が付いた。

椅子につき、紅茶の香りを楽しんでいた主人に微笑しながら尋ねる。

「ところで御主人様。」

「何かね。」

「昨晚はきちんとお休みになられましたか。」

「……………ちゃんと仮眠はとっている。」

目を逸らしながらエルロットは気まずそうに紅茶を口にすが、そういう問題ではない。

どうやら夜通し仕事をしていたらしい。アルシオが知ったらまた一頻り叱りつけるところだろう。流石に彼のように喚きこそしないものの、無論エミリオとて同じ心境である。

姿勢を正し、シャキーンと太字マジックでデカデカと『鉄面皮』と書かれた仮面を装着すると、眼鏡を押し上げてエミリオは口を開いた。

「確かに今は時間がないことは分かります。しかしそれで倒れてしまつては元も子ありません。睡眠はしっかりとってください。」

「む、しかし…」

「でも糸瓜もございません。食事をちゃんと取ることと、夜はしっかりと休養をとるとお約束いただけるまではここを離れるわけには参りません。」

「……………う、むむ…」

尚も洩るエルロットにエミリオは目を細めた。

エミリオの甘い子供のような顔立ちから表情がなくなると、冷たい迫力があつた。

あれやこれたと言えばエミリオは殊更丁寧な言葉遣いになる。それが逆に、怖い。

気圧されたような主人の様子も知ったことかとはばかりに、エミリオはさらに言葉を繋げる。

「無礼は承知の上でございます。ですが主人の体調管理も執事の務めゆえ。どうか私めの言葉にも耳を貸してくださいませ。」

「……努力しよう。」
「ありがとうございます。」

眉間に皺を寄せながらもしぶしぶ頷いた主に、ふわりと微笑を浮かべる。

その眉間に刻まれたヒビのような皺が、不機嫌からくるものではないと分かっているからだ。

感情をうまく表現できず、眉間にしわを寄せるような険しい表情や困った表情を作ったりするのは、不器用なこの青年の癖だった。

「首尾はどうかね」

二杯目の紅茶を注ぐタイミングを見計らっていると、唐突にエルロツトが呟いた。

何の…とは言わない。言葉が足りずとも、それを理解するのがエミリオである。

「どうやら来週『オークション』が開かれるようです。やはりパترونとして御主人様が名乗りを上げられたのが大きかったかと。」

「そうか。あちらのほうは」

「アルシオが良い『市場』を見つけたようで。こちらも問題ありません。」

「うむ。」

眉を寄せたまま頷く主の、空になったカップに紅茶を注いだ。

抜群のタイミングで足されたそれに、むっつりと閉ざされた口元を微かに綻ばせる。珍しく柔らかい表情をしている主にエミリオは不覚にも思わず見蕩れていた。

「君たちには、これからもっと迷惑をかけることになるな。」

その『迷惑』というのがどういうものなのか、エミリオは理解している。

主の言葉の重さに気付きながらも、微笑を崩さず主の手をとり、傳いた。

「私たちは貴方の手足。貴方が望むのなら剣にも盾にもなりましよう。」

それが至高、それが美学。

それが、願い。

エルロットの手は白く、その指は男のものなのに、ひどく脆く見え
た。

痛みを堪えるような腫の、なんと美しいことが。

その瞳に魅入られながらも、微笑を浮かべ、立ち上がる。

重い空気を振り払うように、清しいほどいつも通りのエミリオになる。

「今日は良い天気です。昼はテラスで取るのも悪くないかと。いかがですか。」

突然立ち上がり、纏っていた空気を霧散させたエミリオを、ポカンと見上げていたエルロットだが、握られていた手を見つめ、窓の光を見、最後にエミリオに目を向けると

「…君に、任せよう」

陽の光に溶けそうなほど、淡く微笑んだ。

「御心のままに」

この優しい時間が来週には失われてしまうのだと分かっているながらも。

二人はそこから、目を逸らし、お互いに微笑んだ。

つかの間の、平穏が始まる。

ACT 1 第二手

「お集まりの紳士淑女の皆様！長らくお待ちいたしました。」

それでは、本日の目玉商品でございます！」

仮面で素顔を隠した中年男が、劇中の陳腐な台詞でも読むように高らかに声を張り上げるのを、男は人事のような表情で牢の中から聞いていた。

この大きな商品が終われば一先ず今日のオークションは終了だ。表向きには、だが。

この後、表の世界では少々風当たりのよろしくない商売が行われるのだ。

内容は、『人身売買』。

ある者は労働力を。ある者は見目麗しい妾を。またある者は臓器そのものを。

表立っては手に入れること困難な『人間』という商品を求めて。

今彼が放り込まれている檻の中には、彼と同じようなぼろ布を辛うじて身につけた人間が何人も押し込まれていた。大体がぐったりと倒れふすか、ただ酷い顔色をして震えているか、檻の柵に噛み付い

て、必死に出ようとしているかで、何もせずただぼんやりしているだけの彼の存在は少し浮いている。

所詮この檻の中に入れられているのは、彼と同じく奴隷商に売り飛ばされ、今夜『買われる』者たちだ。その多くは、困窮な親や友人に売られたり、中には行き倒れたところを商人に拾われたりと、生への執着が途切れぬものばかりで「まあそれも仕方ないと思うが」怯えたり、抵抗したりと忙しない。

まだ『ヒト』としての感情を捨て切れていない彼らに、男は少しだけ目を細めた。

「いつそ俺みたいにならねれば楽なのにね」

男の年の頃は三十路半ばといったところ。背はさして高くない。

その割りに綺麗な筋肉の付き方をしており、痩せ過ぎず太過ぎずな引き締まった体。

存外しっかりした腕には、重々しい鉄枷が嵌められていた。

ガラス玉を彷彿とさせる虚ろな瞳は碧く、赤みがかつた黒髪は水気がない。

やる気は一切が感じられぬ気の抜けた顔は、全てを諦めてしまったように感情の起伏が緩やかだった。

ふと横から聞こえてくる地鳴りのような呻き声に視線を流す。

こちらも男と同じく、節張った大きな手を封じる手枷を嵌めている。俯いているので顔は分からないが、何となくくたびれた感じとすこし筋肉の落ちた体付きから、自分より少し年上の中年だろうと男は勝手に納得する。

その中年は、抵抗したときに殴られたのだろうか、所々青あざや擦り傷を作っていた。

何となく気まぐれに、男は隣で頭を抱えて沈んでいる中年男性に声をかけた。

「そんな唸ったってこの手枷は取れないよ。」

不自由な手をがしゃんと鳴らしてそう言うと、中年はがっとな顔を上げた。

目の下に隈が出来ており不健康そうに見えるが、やつれてるわけではなさそうだ。意外と渋い顔立ちで若いころはモテたのかもしれない。

相手が身を起こしたので分かったのだが、中年は男よりも背丈が大きかった。が、筋骨隆々というわけではなくむしる瘦躯で、ひよつとしたら男のほうが体重があるかもしれない。

この場に不釣り合いな男の表情を見て怪訝そうな顔を見ると、中年は眉をしかめた。

「何だいきなり。今から奴隷として売り飛ばされるんだ。少しくらい絶望したって良いだろ。」

「人生生きてれば奴隷になることの一度や二度あるよ。気にしなさんなって。」

「…アンタ、分かってんのか。奴隷になったらもうそれは人間じゃない。物みたくに使われ、使い捨てされてくんだぞ。落ち込まないほうがおかしい。」

「死ぬよりいいんじゃない？」
じっとりとした目で言われるが、男は肩をすくめてやる気のない声を出す。

男の言葉を聞くと、不機嫌な顔で吐き捨てるように中年も言い返した。

「俺は嫌だ。そんな風に腐るくらいなら死んだほうがマシだ。」

「難儀な性分だね。」

「お互い様だろう。」

そんなふうには舞台裏でこそそと話している間もオークションは進んでいく。

ハンマーの音、金額を名乗り上げる声、もう一声と煽る支配人の言葉。

それらの雑音は、檻の中の『商品』を追い詰めるには十分だった。自分たちが『ヒト』でいられる時間が刻一刻と減っているのを理解し、中には発狂しそうなものもいるのに男は飄々としている。

それどころか暢気に欠伸など囁み殺しているのだから、流石に中年は呆れてしまった。

「長いね。こうしてるの飽きてきちゃったよ。」

「気楽な男だな。」

「ありがとう。」

「褒めてないぞ。」

明らかに場にそぐわない和やかな会話をしていると、最後の商品が落札したことを知らせる声上がる。同時に檻の中の空気が凍りつき、誰もが瞳に絶望を映した。

ただひとり、黒^{くろ}油^ゆの髪を持つ男を除いて。

*
*
*
*
*

時は少し遡って夕暮れ前。

エミリオが夕餉の買出しから戻ると、玄関の前には一台の馬車があった。

扉には玄関のノッカーと同じ鷹のような装飾が施されている。間違いなく屋敷の主、エルロット個人の所有物ものだった。

馬ではなく、馬車を所有しているということはさすが上流階級。

「おかえりなさ〜い！エミリオ！！」

「ただいま。つてアルシオ、その格好は…？」

エミリオを迎えた元気な声。アルシオに目を向けると、思わず呆けにとられた。彼の格好が、いつもの使用人服ではなかったからである。

桃色と白が幾重にも重ねられ、ボリウムがある裾に、腰も赤いリボンで締められ、手もレース柄の手袋で肘まで覆われていた。いわゆる社交界で着るようなドレスである。

エミリオの視線に気付くと、アルシオは裾を持ってその場でぐるりと回って見せた。

「どうどう？似合ってる？アルちゃん可愛い？」

「あ、ああ。良く似合ってるよ。」

「きゃ〜ん！もお〜ん！エミリオったら正直なんだからあ！」
正直にそう言うと、アルシオは嬉しそうな顔をキヤツと押さえてくねくねする。

傍から見たら確かに恥らう乙女だが、中身は立派に野郎である。

悲しすぎる現実から目を逸らしてエミリオはドアに寄りかかっていた主人に目を向ける。

「戻ったか」

表情こそいつも通りの彼だが、その格好はいつものスーツとは明らかに異なっていた。

黒を基本としたテールコートで派手な飾りは一切なく、細身の体よりシャープに見せている。クラバットも普段のものより装飾が繊細になっており、小夜啼鳥ナイチンゲールのクラバットピンは艶やかな紅のものに変わっていた。

「もう出かけられるので？」

「うむ」

「かしこまりました。ただいま馬車の準備を……」

そこまで言って腰を折ると同時、屋敷のほうから愛らしい声。

「エミリオ……！！御主人様……！！見て見て……！！」

ふっと顔を上げると目に入ったのは珍しく驚いた表情の主。

視線の先を確認して、エミリオも目を見開いた。

「じゃ……ん！！フラウリツシユお嬢様、コーディネートBYアルちゃん……！！」

アルシオが押してきた車椅子の上に座る少女。

恥ずかしそうに白い頬を染め、照れ笑いにはにかむ花のような笑顔。緩くウエーブのかかった豊かな琥珀色の髪に、大きな朝焼けの瞳。

この屋敷の主エルロットの妹であり、もう一人の住人フラウリツシユだった。

「どうですかあ……？お嬢様可愛くなったでしょう？ぐっどじよぶ？」

「……アルシオ。君は本気でフラウリツシユも連れて行くつもりか？」

眉間にヒビを入れたエルロットが腕を組んでアルシオを見下ろす。どう見てもご機嫌とはいえないその表情を前に、アルシオはすっとほける。

「ふえ？違うんですか……？」

「当たり前だ！フラウリツシュをあんな人ごみに連れて行けるわけがないだろう！！」

一喝。

鬼の形相でそう言うのは、決して意地悪で言っているわけではない。事実エルロットの言った通りなのだ。

フラウリツシュは幼少のころ火事に巻き込まれ、全身に酷いやけどを負った。肌が酷く焼け爛れ、生き残ったことさえ奇跡に近い。今も顔の左半分を除いて、全身を痛々しい包帯が覆っている。以来ただでさえ弱かった体がさらに虚弱になってしまい、外出も出来ないのだ。

そのフラウリツシュを連れて行くなど、エルロットが許す筈もない。

しかしそんな主のお怒りもなんのその。

アルシオはすまし顔をして、さも他意はありませんとばかりに肩を竦める。

「でもでもお〜〜。お屋敷に一人ぼっちなんてかわいそうですよ。う。」

「だから君に留守を頼もうとしていたのだ。それを君が…ッ！」

「だってえ。このお屋敷の金銭面を任されてるのは私ですからあ。」

私が行かなきゃ、ね？と小首を傾げるアルシオにエルロットは唇を震わせる。

なるほど。とエミリオは内心理解する。

強引な屁理屈をこねて、生真面目な主人が悩んでいる間にこうして準備を進めたわけだ。相変わらず世渡り上手な弟である。

「っではエミリオ。留守を頼」

「言っておきますけどお〜エミリオがいなかったら馬車使えませんよお〜？」

いいんですかあ〜？と聞くアルシオは完全に確信犯だ。

アルシオ「ロッター。敵に回すと恐ろしい少年である。

「ぐむむ…」

「大丈夫ですよ。お医者様から、馬車から出なければいって許可は頂いてありますからあ。」

なるほど確かにこの馬車は魔法で外と完全に隔離されている、いわば動く結界だ。この中から出なければ雑菌に触れることもないだろう。

それでも外に出るべきではない。きっとそれが医者最大の譲歩なのだ。

「しかし…」

エルロツトも迷った。彼とて妹に外を見せてやりたい気持ちはあるのだ。しかし妹の体を考えれば外に出すべきではない。しばらく一同は沈黙とワルツを踊ることになる。

「あの、お兄様…私も…行きたい、です…」

沈黙を破ったのは、おずおずと囁かれた小鳥のような声だった。

声の発信源は、フラウリツシュ。

きゅつと膝の上の手を握り締めて、健気にこちらを見上げていた。

そんな顔を見せられては、鋼鉄の意志を持つ主も揺るがざるを得ない。後一押し。

「御主人様。この広いお屋敷で、一番大切な人に置いてかれるのって、すつごく心細くなるの、知ってますか。」

アルシオも笑顔を引っ込めて、一言一言をかみ締めるようにそう言った。

双子だけあって、アルシオには珍しい真面目な表情は、エミリオと酷似している。

その言葉が、アルシオの本音を語っていた。

それはさておき銀時計を開いて時間を確認し、高速でタイムスケジュールを組み立てると、エミリオは燕尾服の裾を翻した。

「では急ぎ身支度を整えてまいります。ああ、あと軽く摘めるものも用意しましょう。」

「やったー！エミリオ大好き！」

エミリオは屋敷の廊下を進みながら、踵を返す直前に目に付いたものを思い出した。

エルロットの黒いテールコートの模様。

黒のキャンパスには黒糸で装飾が描かれていたため、初見では気付かなかった模様は。

艶やかに咲いた、大輪のバラ。

ACT 1 第三手

「おいおい何だいこの差は。」

己を戒めている鉄枷と、反対側で椅子にしな垂れかかっている女とを見比べて、男はため息をついた。

「差別はよくないよ。どうしてあの人は拘束されてないのに俺たちはこんな重たいものをつけなきゃならないんだい？」

「女だからじゃないか？」

相変わらずの表情でぼやく男の独り言に、中年が静かに答えた。絶望が強すぎて諦めに達したのかもしれない。中年の顔は幾分すつきりしていた。

そんな中年の言葉を聞いているのかどうなのか、興味なさげにふうんというと、虚空を眺める。

思案してたのかそうでないのか。

「でもなあ。女の人でも強いのは強いよ？俺の知り合いに男を素手で三十人伸した人いるし。」

「そりゃ凄いな。だがあの女はおそらく娼婦だろう。アンタの言う力自慢なゴリラ女とは違うんじゃないか？」

「んー。ゴリラ…ねえ？」

中年の言葉に意味深に答える男の顔は何かおかしいのかニヤニヤと笑っている。

「何がおかしい」

「いや、その言葉を本人に伝えたら何と言っかなと」

「馬鹿なことを。奴隷が自由に誰かと会話するなど許されるわけがない。」

「夢のない男だな。」

「結構だ。」

会話が途切れ、男はつまらなそうに周りを見回す。そこには檻、檻、檻。檻しかない。歩き回っているものは大体が仮面をつけ、黒のスーツと黒のネクタイ、黒のスラックスに黒のサングラスと一貫している。当然目の保養になるものなどありはしなかった。

「この暗闇の中でよくグラサンなんかかけてられるねえ。」

「アイデンティティなんじゃないか？」

「わああ。めんどくさ。」

ハツハツハと胡散臭く笑う男に、突っ込む元気もないのかため息をつく中年。

「……………気楽なものだな」

小夜啼鳥ナイチンゲールが啼くように、静かながらも良く通る声だった。

それに驚いたとき、既に世界は暗くなっていた。自分たちの檻の前に誰かが立っているのだ。唐突に現れたその人物を振り返る。

そして檻の中の全員がその人物に見蕩れた。

線の細い、間近で見れば思わずため息の零れる端正な顔立ち。白磁の肌に、アッシュグレイの髪と涼しげなアメジストの瞳。

スラリとした細身の長身をさらにシャープに見せる漆黒のテールコートはどう見ても質のいいもので、純白のクラバットと対照的な深紅のクラバットピンが、妖しく光を放っている。

『な、なんて、場違いな…』

檻の中の全員心がひとつになるのも無理がないほどにその存在は異端。

張り詰めた空気を纏う見目麗しい青年が、檻の前で腕を組んで立っていたのだ。

「…なんだろうか。」

不躰に自分を見る視線に対し、居心地悪そうに青年が呟いた。眉間に寄せられた深い皺は、元が綺麗だけに不必要な威圧感がある。正直言って怖い。

柵に一番近い…すなわち青年に最も近い位置にいた黒釉くろゆうの男が、おずおずと口を開いた。

「え、と…だ、誰？見たところグラサンブラザーでもなさそうだし」

「…？ぐらさんぶれいか？何だそれは。」

男の言葉に怪訝そうに眉を寄せる。さらにアップした迫力に、慌てて台詞を要約する。

「ええつと、つまり見かけない顔だつてことだよ。」

「む、それはそうだろう。今来たところなのだからな。」

遠まわしに『Who are you?』と尋ねているわけだが、その言葉に青年は傾げていた首を戻して当たり前のように素っ頓狂なことを言う。

「うん。そうだろうね。そんな格好してたら目立つことこの上ないしね。で、キミは誰？」

面倒くさくなってストレートに聞いた。すると青年は無表情に一言「客だ」とだけ言った。

「客？じゃあ俺たちを買い取りにきたってコト？」

「まあそうなるだろうな。」

「ふうん」

その言葉を聞いて何事か思案するように虚空を眺めていた男は、不意に何か思いついたようにニヤリと口角を上げる。そして青年の姿を舐めるように見上げ、首に付いた値札を見せ付けるように摘むと、耳元で囁かれたら腰が砕けてしまいそんな低い声で囁いた。

「じゃあさ。キミ、俺のこと…」
「かつて『みない?』」

「……………何か言葉のイントネーションが怪しい気がするのだが。」

…果たしてその言葉は『買って』なのか『飼って』なのか。その答えは男のみぞ知る。

それはともかく突然そんなことを言われたにも拘らず、青年は表情をピクリとも変えない。無論すっかり刻まれた眉間の『ヒビ』もそ

のままだ。そんな青年を楽しそうに見上げる男は再び艶然と微笑んで再び問う。

「それで、お兄さん？答えは？」

「…生憎今は持ち合わせがないのでな」

「それは残念。」

肩を竦めると同時、纏っていた過剰な色香を霧散させる男に、檻の中の人間は無意識に入っていた力を抜いた。

「そういう台詞はもつと可愛らしい女性に言っただけで済ませよう。」

呆れたようにため息をつく、青年はくるりと踵を返した。

「あ、ちよつとお兄さん！」

男が呼ぶ声もそのままに、青年はさつさと奥に消えてしまう。舞台裏の奥はさらに深い闇になっており、黒衣の青年はあつという間に暗闇に溶け込んでしまった。

「…いやあ、不思議な子だったねえ」

「……………アンタも十分不思議だ。」

「え、そう？何、俺ミステリアス？」

すっかり調子が戻ってしまった男に、中年は寒気を覚える。この男はいつたいたいどちらが本物なのだろう。その気の抜けた笑顔の裏に、とんでもない化け物がぼつかりと口をあけて待っているような幻覚を覚えた。

底知れぬ恐怖。それを誤魔化すように男の言葉に乗る。

「あなたはミステリアスって言うより胡散臭いだな」

「ひどいなあ。」

へらりと笑うその顔が、いまはひどく気味が悪かった。

少し時を遡り、軽食を取り終わったアルシオたちが、豪華な馬車に乗り込んだところ。

「出発~~~~~!!」

アルシオの元気な掛け声と共に、エミリオは馬鞭を鳴らした。

瞬間がたりと箱の中が揺れ、不安定な体制だったアルシオが、エルロツトの方に倒れこんできた。それをエルロツトは華麗な動きでひらりと避け、哀れアルシオはその形のいい鼻梁を強かに背もたれに叩きつけることになる。

「ぶうぶう~~~~!! 酷いです御主人様マスター！そこは優しく抱きとめてくださいよお〜！」

「生憎私に男を抱きしめる趣味はない。」

「ぶうぶうぶう~~~~~!!」

あっさり切り捨てる主の言葉にますますぶーたれながらアルシオは席に付いた。そんな様子を眺めていたフラウリツシュが、口元に指を添えてくすくす笑う。

「あー！お嬢様まで酷いですよお！」
「ふふ…ごめんなさい。大丈夫ですか？」
「その台詞、笑う前に言っていたただきだったですう。」
赤くなつた鼻を摩りながら、涙目で訴えてくるアルシオの頭をよしよしと撫でるフラウリツシュ。傍から見ればなかなか癒される光景が繰り広げられていた。

「そう言えば御主人様。向こうではどちらでお呼びしたほうがいいですかあ？」
頭を撫でられていたアルシオが、途端顔を上げてこちらを見た。その鼻はまだ赤く染まつていて、少し間抜けた。そんなことを考えながら、少しだけ思案すると、エルロットは薄い唇を開いた。

「…仮名かめいのほうだ。」
その言葉を聞いて、一瞬だけアルシオの顔から笑みが消える。だがあ、と言う前にころりといつもの笑顔に戻っておどけてみせた。

「はあ〜い分かりましたあ。てことは、やっぱりお嬢様も？」

「うむ」

長い足を組み替えながら、エルロットは頷いた。

彼らが言う仮名というのは、所詮コードネームのようなものだ。

ランスロット家の男は代々、末の息子が15になつた時点で優劣順に数字が与えられる。また、フラウリツシュたち女姉妹もそれに倣い、優劣順でアルファベットが与えられている。

男たちはその数字を名乗り、女たちはその文字を頭文字にした名を名乗る。

エルロットに与えられた仮名は『ドライツェン』。ドイツ語で『13』という意味。

フラウリッシュに与えられた仮名は『マリア』。アルファベットの『M』を示す名。

ランスロット家は、最も優秀なものだけが己の誠名せいめいを名乗ることを許される。

つまり、今ランスロット家で誠名を名乗ることが許されているのは、家督のシュドナイ＝ランスロットだけになる。

それ以外の『弱者』は、割り振られた『型』を名乗るしかないのだ。エルロットもまた、誠名を名乗ることは許されない。こうして親しいものだけの間ならまだしも、外に出てしまった以上、『ドライツェン』として生きなければならなくなる。

面倒とは思うものの、こればかりはどうしようもない。

『強者』を求めるランスロット家にとって、自分などは何十番目かの『ドライツェン』に過ぎないのだから。

思考の海に沈んでいたエルロットの裾を、前に座っていたフラウリッシュが引いたことで、現実せいかいに引き戻される。はっと顔を上げると、小窓から外を指差す妹の姿が見えた。

「お兄様、あれが」

どうやら自分は随分と上の空だったらしい。

すっかり沈んだ空を背に、目的の建物がぼんやりと浮かび上がっていた。

さて。

未だ互いに名前も知らない中年男性と男が心温まる会話をしている
と、ふいに奥のほうで騒がしくなった。従業員用の入り口だ。何事
かと、中年と顔を見合わせ聞き耳を立てる。するとこの場には酷く
不釣合いな、幼い声が聞こえてきた。

「あのあの！人を見かけませんでしたかあ？背が高くって身形のい
い、すつごくかっこいい男の人なんですけどお！」

「こつこつ：灰色の髪で、黒いテールコートを着た男性です。紅いクラ
バットピンをして…」

聴きなれない声が二つ。一つは底抜けに明るく、もう一つは物静か
なもの。不思議なことにもどちらも印象は酷く違うのにその声はまっ
たく同じものだった。

「さあて…見てないねえ。」

次いで、先ほど司会をしていた男の声が聞こえてくる。子供相手だ
からか、少し優しい声になっていた。

「もお〜〜。どこいつちゃったんだろ〜〜？」

「そう、ですか…ありがとございました。」

困り果てた様子の酷似した声たちが遠ざかっていく。どうやら人を
探していたらしい。『背が高く』『端正な顔立ち』の、『黒いテ
ールコート』を着た『青年』。

「そんなのいたら目立ちまくるよねえ？」

「そうだな」

「『場違い』にも程があるよねえ…？」

「ああ」

自分と同じく聞き耳を立ててたらしい中年にへらりと笑いかけると、男前に頷かれる。しかし、その額にはうっすら汗が滲んでいる。檻の中の奴隷予備軍は皆してポカンと間抜け面をしている。そんな中、男もまたハハツと力なく笑った。

「……………あの子…迷子だったのか…。」

眉間にヒビを入れたひどく美しい小夜啼鳥の顔が、その檻の中全員の脳裏を過ぎったのは言うまでもない。

ACT 1 第四手

「ム？」

飲み物で両手を塞いだエルロットは、馬車の周囲に双子の姿がないことに気が付いた。馬車の中に確認できる妹も、何故か心配げな面持ちで顔色が優れないようだ。不安になって早足に馬車に近づくと、コンコンと扉を叩いてフラウリツシュに声をかけた。

「フラウリツシュ。二人はどうした？」

「え、あ、お兄様！？どうしてここに！！？」

明らかに何かあった様子のフラウリツシュは、エルロットの姿を認めるとひっくり返りそうな勢いで驚いていた。そんな妹の姿にエルロットはますます首を傾げてしまう。

「どうしたのかね、そんなに慌てて。何かあったのだろうか。」

「どうしたもこうしたもありませんわ！二人ともお兄様を探しに行つたのですわよ！！！」

憤慨した様子でフラウリツシュが声を荒げるが、エルロットはその言葉に怪訝そうに眉を寄せた。

「…？妙だな。私はエミリオに行き先を告げて、了解を得たはずだが。」

しかも馬車を離れてからそう時間も経っていない。行き先も告げずに何処かへふらりと行ってしまったなら探しに出るのは仕方ないか

もしれないが、それにしたって病弱なフラウリツシュを一人きりにするなど不自然だ。

エルロットの言葉にフラウリツシュはきよとんとしていたが、やがて考えるように眉を寄せる。

「それは…本当なのですか？だとしたら確かにおかしいですわね。」
了解を得た…つまりエルロットとエミリオは『会話』しているのだ。
しかもあのエミリオが上の空で空返事をしたとは到底考えにくい。

「何か引つかかるな。どちらにせよここから離れないほうがいいだろう。」

右手に持っていたジュースをフラウリツシュに渡して、エルロットは珈琲に口をつける。

今馬車はオークション会場の前に止めてある。『人身売買』が始まるにはまだ時間が有るので、こうして飲み物を買いにいったわけだが。

「一体何があつたのかね」

「私にも良く分かりません。ただ二人が何か話したかと思うと、大慌てでお兄様を探してくる、とだけ。」

「何だそれは。」

エミリオはエルロットが『どこへ』、『何をしに』行ったか知っている。大体エルロットが行った屋台はそれほど離れていないし一本道だ。探しに来たというなら出くわしていても何らおかしくない。と言つことは考えられるのはアルシオがエミリオの話の聞かずに早とちりして探しに行った…くらいだろう。それにしたってこんなに時間はかからないだろうし、エミリオがいなくなる道理がないのだが。

「まったく…自分で付いてきたいと言つたくせに何を考えているのだ。」

才は「そうなんですよお」と答えるが、まだ何か考えるような難しい顔をしたままだ。

それでは話筋が通らない。

とにかくエミリオに話を聞かないことには、先に進めそうになかった。アルシオは相変わらず「おつかしいなあ」と呟き、フラウリッシュも少し不安げに考え込むばかりである。

「エミリオはどうした。」

そう言つて辺りを見回すが、アルシオと同じ顔をした執事パトラーの姿が見当たらない。エルロットの言葉にアルシオは困った顔で、

「それがあ…手分けして探そうつて言われて、二手に分かれたんですよ。で、少し探したけど見つかりそうになかったから、お嬢様も心配だし私は早めに引き返してきました。」

「では、まだ私を探しているということか？」

「馬車に帰ってきてないってコトは…そうなりますよねえ。」
「うう…」と唸るアルシオはどうやら嘘は言っていないようだ。

「仕方がない。私が探してこよう。アルシオはフラウリッシュのそばを離れるな。」

「え？でも、いいんですかあ？」

「そのほうが効率がいい」

悔しいことだが、おそらく自分よりはアルシオのほうが接近戦には長けている。それにこの辺りは屋敷からあまり出ないアルシオでは、逆に迷子になる可能性のほうが高い。その点自分はこの辺りはフィールドワークで何度か訪れているから、アルシオよりは土地勘があるはずだ。

「基本的に財布は君が管理しているから、私が間に合いそうになかったら私の代わりに君が『駒』を揃えてくれ。」

「分かりました。」

神妙な顔立ちで頷くアルシオを確認してから、フラウリッシュに目

を向ける。その顔は不安げな色が濃く、それを振り払うように、わざと地を這うような声を出す。

「それと…フラウリツシュを次一人にした場合は、減給だ。」

「神に誓ってお傍にいます!！」

「よろしい。」

そう言うと、後ろにいたフラウリツシュの顔が少しだけ和らぐ。天使のような笑顔で「お気をつけて」と言われ、エルロットはらしくないと理解しながらもふわりと微笑み返す。

全速力で戻ってこよう。

シスコン全開な思考で決心すると、エルロットはテールコートを翻して夜の街に溶け込んだ。

エミリオはかなり目立つ。

小柄な体に不釣り合いな燕尾服に、亜麻色の髪に良く似合う珍しい金色の瞳。

あまり見た目に気を使わないため本人は気付いていないが、基本はアルシオと同じ顔なのだ。顔立ちだって整っているし、あの涼しい表情は年齢にそぐわないのでかなり印象深い。

証拠に、道行く人に声をかけると、三人目で早々に目撃情報があった。

目撃された場所は、なんと自分たちの目的地だったあのオークション会場の裏口。エルロットも後を追ってそこに向かう。

従業員入り口は人で込み合っているのも、もっと奥のテントの隙間からそつと中を伺う。周りを見回す。そこには檻、檻、檻。檻しかない。

目当ての燕尾服を探すが見当たらない。とにかく従業員に声をかけようとするのだが、如何せん動き回っていて話しかけられる雰囲気ではない。

黒のスーツと黒のネクタイ、黒のスラックスに黒のサングラスと何処かやりすぎた感漂う相貌に少し、引いた。というかこの暗闇でサングラスをかけるのは如何なものかと思う。前は見えているのだろうか。

「この暗闇の中でよくグラスなんかかけてられるねえ。」

肩が跳ねた。

一瞬口に出したのかと思ったが違う。どうやら檻の中から聞こえるらしい。自分と同じことを思っていた男がつまりならぬように柵越しに忙しく動き回る男たちを眺めていた。

何となしにその横顔を観察していると、ふと男の隣にいた中年が口を開く。低い声。

「アイデンティティなんじゃないか？」

「わあお。めんどくさ〜。」

ハツハツハと男が笑うリズムに合わせて、肩の上で方々に跳ねる黒^{くろ}油^ゆの髪が揺れた。鼓膜を震わすその声は存外明るいもので、これから買われるものの声とはとても思えない。最近の奴隷は皆こうなのだろうか。

「……………気楽なものだな」

思わず呟いた声に、檻の中の全員が驚いたように振り向き、そして自分の姿を認めるや否や、何故か口をポカンと開けて固まっていた。

しばしの沈黙。檻の中の視線という視線が矢のように突き刺さる。

「…なんだろうか。」

不躰に自分を見る視線に対し、居心地悪くなって眉間に力が籠る。途端檻の中の半分以上が怯えたように顔を逸らす。何なのかさつきから。

ふとそのとき柵に一番近い…すなわち自分に最も近い位置にいた黒油の男が、おずおずと口を開いた。

「え、と…だ、誰？見たところグラサンブラザーでもなさそうだし」

「…？ぐらさんぶれいかー？何だそれは。」

意味不明な男の言葉にますます眉に力が籠る。すると男は慌てたように目を泳がせ、言葉を下の上で転がすように口にする。

「ええっと、つまり見かけない顔だっただよ。」

「む、それはそうだろう。今来たところなのだから。」

当たり前前のことを言われ、何を言っているのかと少し呆れた。間髪いれず言い返すと男は何故か頭を抱えて、失敗した笑みを浮かべてきた。

「うん。そうだろうね。そんな格好してたら目立つことこの上ないしね。で、キミは誰？」

どうやら自分の正体が知りたかったらしい。それならそうと最初から言えと思いつながらも、何とか抑えて無表情に一言「客だ」とだけ言った。

「客？じゃあ俺たちを買い取りにきたってコト？」

「まあそうなるだろうな。」

「ふうん」

その言葉を聞いて何事か思案するように虚空を眺めていた男は、不意に何か思いついたようにニヤリと口角を上げる。何となく背筋に戦慄が走り、思わず仰け反りそうになるが、負けん気で堪える。すると何を思ったか、男は首に付いた値札を見せ付けるように摘むと、耳元で囁かれたら腰が砕けてしまいそんな低い声で囁いた。

「じゃあさ。キミ、俺のこと…」 『かって』 「みない？」

「……………何か言葉のイントネーションが怪しい気がするのだが。」

この男は一体何を言い出すのか。

崩れそうになった不機嫌の仮面を根性で貼り付けたまま男を睨み返す。そんな自分の様子を楽しそうに見上げる男に不快感を感じ、眉間の『ヒビ』が悪化した。

「それで、お兄さん？答えは？」

「…生憎今は持ち合わせがないのでな」

「それは残念。」

嘘は言っていない。

そんな自分の言葉を聞いてわざとらしく肩を竦めると、先ほど見たへらりとした顔に戻った。何となく、ほっと息を吐き出してしまふ。それが安堵からくるものとは気付かないまま。

「そういう台詞はもっと可愛らしい女性に言ってやりたまえ。」

「あ、ちよつとお兄さん！」

男が呼ぶ声もそのままに、エルロットはさっさと奥に逃げ込んだ。舞台裏の奥はさらに深い闇になっており、不必要に聴覚が鋭くなる。向こうから微かに聞こえる男の声が、未だ背中にこびりついて離れないような気がした。

そこでエルロットの意識は途切れた。

「あーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！！！！！」

近所迷惑な弟の声で、エミリオの意識は覚醒した。先ほどまで夢を見ていたような気がするのだが、分からない。頭がぼんやりとしていて、熱で浮かされてるようだった。

「もう！！エミリオったらどこ行ってたの！！心配してたんだから！！！」

どうやらカンカンに怒り狂った様子のアルシオに、エミリオは怖気づく。だが怒られている理由が思い至らない。

「え…あ、アルシオ？何の話…」

「あーあー。また行き違いかあ…しょうがないなあ。また行き違いになるの嫌だしここで待ってようか。」

「え、と、あのアルシオ…」

話を通じない。何か困った様子でぶつぶつ言うアルシオに何か聞くのは諦め、馬車の中のもう一人の主を伺う。

「あの、フラウリツシュ様…」

「エミリオ！どういうつもりですか！貴方お兄様から行き先を聞いていたのでしょうか？それなのに何故さもお兄様から何も聞いていないかのような態度をとったのですか！」

珍しく声を荒げて叱るフラウリツシュにますます頭が混乱する。ひとまず話を整理しようと諸手を挙げて降参のサインを出した。

「お、お待ちくださいお嬢様！お言葉ですが、おっしゃる意味がよ

く分からないのですが…」

「あー！そういうこと言うんだあ。いーけないんだーいけないんだー。往生際悪いなあ」

いじめっ子のような顔でにやりと笑うアルシオだが目はまったく笑っていない、フラウリツシユも表情こそ菩薩のような笑顔だが、目の中のオーディエンスが鬼と死神では恐怖以外の何者でもなかった。

「どうしたもこうしたもありません。貴方が言ったのでしよう？お兄様がいなくなつたと」

「ふえ？」

言われた台詞に、エミリオには珍しく無防備な声を出した。

「ふえ？じゃないでしょーが！ちよつと可愛かつたけどさ！」

「ちよ、ちよつと待てアルシオ！本当に私がそんなことを…？」

「今まさに口から羽ばたいたところじゃん！！『ふえ？』って」

「そつちじゃない！私が言っているのは…わひゃあ！！？」

そこまで言つてエミリオが素つ頓狂な声を上げた。アルシオも驚いたように目を見開く。

ただ一人、双子から注視されているフラウリツシユだけが静かな声を出す。

「エミリオ…貴方の体から、僅かですが『魔法』の残り香を感じます。」

「つておおおおおおおおお嬢様！！！！いいいいいいいいいいいけませんのような！！」

エミリオが真っ赤になつて手をばたばた振つた。

それもそのはず。フラウリツシユはエミリオの燕尾服の胸倉を思いつきり掴んで、露になつた白い胸元に鼻を寄せているのだから。

「お、お嬢様？『魔法』…ですか？」

割と早い段階で正気に戻つたアルシオが「まだ若干顔は赤いものの」真面目な顔で尋ねると、フラウリツシユはその姿勢のまま頷く。

「はい。それもただの魔法ではありません。特殊な系譜の魔法で、しかもかなり古いものです。」

「そそそそそそここで話さないでください!!」

未だ茹鞘のままなエミリオは軽く流して、二人は会話を続ける。

「特殊…ですか。」

「私はこの魔法を、以前ある場所で見たとあります。」

「え?」

「正確には『魔具』を…ですが。」

そのフラウリツシュの言葉に、トマトみたいになっていたエミリオが、ふと動きを止めた。赤かったはずの顔が強張り、若干青ざめて見える。

その様子を見て「おお今度は青くなった」などと呟くアルシオは将来大物だ。

「まさか…」

エミリオが恐る恐る呟くと、フラウリツシュはそつと頭を垂れる。そのまさかだから。

「その『魔具』の在処は本家…ランスロット家の円卓の広間にあつた掛け軸。」

末の男が15になると同時、仮名かめいと一緒に26枚のカードのうち、与えられる1枚。

「ランスロット家が所有する魔具タロットの一枚、恋人チャーム。」

「じゃ、じゃあ…エミリオは、操られていたつてコトですかあ!?!」
「はい。先ほどの様子からすると、そう考えたほうが自然でしょう。」

「そんな…」

双子の片割れが操られたとなって、アルシオが青ざめた。それも仕方が無いだろう。相手の目的はまったく分からない上に、エミリオには操られているときの記憶がないのだ。

しかし、たった一つだけ分かることがあった。

「おそらく…来ています。『恋人』の持ち主である末の妹…アリスが。」

そしてそれが意味することは一つ。

「「御主人様…!!」」

ACT 1 第五手

戦乱の世で栄華を極めた名門貴族ランスロット家。

圧倒的な武力と魔法の才。戦で武勲を残すことを何よりもの美德とする一族である。

力あるものが上に立つことが必然と、血塗れた剣を振るう姿は鬼か悪魔か死神か。

末の男が15になった時点でランスロット家は古来より総督争いとして、ある『娯楽』^{ゲーム}を行う。

ルールはチェスとほぼ同じだがそこには大きな違いがある。

まず一つは駒が本物の人間であること。

もちろん装備や魔法も本物で、50×50四方の上で人間同士が殺し合いをするのだ。昔から決闘や死合というものは貴族の娯楽であった。

もう一つは『魔具』^{タロット}と呼ばれる一人ずつに配られる、いわば試合における『切り札』^{ジョーカー}だ。

一枚一枚特殊な系譜でありその殆どが今は失われた禁術の力を持つ、ランスロット家の家宝である。

強すぎる力を使うには当然ながら『代償』^{リスク}があるが、それを含めた上で、いかにして戦うか。

ただ戦えればいいというわけではない。それだけの強大な力をいかにして手懐けるか。利用できるか。その力を見るための試合である。

無論例外はなく、今年も兄弟同士で血を流す時が訪れる。

「もう…決まっていることなんだよね…『フォルトウナ』」

誰に聞かれることない呟きが、闇に溶けた。

石造りの壁の冷たさで、青年は目を覚ました。

意識が浮上したばかりで全身がだるく、頭がまだふわふわしているような錯覚に陥る。緩く頭を振って起き上がるうとしたが、手首に引きつるような痛みが走り、自分の体が柱に括り付けられているのだと気付く。

ああ自分は攫われたのかとゆっくり先刻の記憶が蘇ってくる。何か薬を嗅がされたのか、酷く頭が重い。ガンガンと耳元で鐘が鳴っているような痛み、頬を汗が伝う。

「ようやく目が覚めました?」

突然部屋の沈黙が破られた。小さな牢獄部屋の端から声がし、その声が暗い密室を反響する。未だ止まない頭痛に顔をしかめながら、青年は重い瞼を押し上げ、音の発信源を見た。

まず目に入ったのは磨き上げられた黒のヒール。銀の刺繍を縫いこまれたドレスは深い紅色で、幼い体格を補うようにふんだんにフリルやレースの装飾が施されている。裾のほうに銀糸で大輪のバラの刺繍が施されている。

この闇の中でも輝きを損なわない艶やかな金色の髪に、ああそういえば彼女の母君は美しい金糸の豊かな髪をしていたなと思いつく。月明かりを受ける父親譲りの朝焼け色の瞳がその闇の中で酷く印象深く残っていた。

「やはり…君か。」

まるで従者の姿を認めたかのような自然さで、青年は椅子に座ったままの童女を見上げる。こうなることを予測していたかのような口ぶり、と表情に童女は不愉快そうに眉をしかめる。

「随分と落ち着いてますのね。」

「お気に召さなかったかね。」

「無粋な殿方ですこと。」

幼い顔立ちに似合わない冷たい表情で、自分よりもずっと大きな青

年を見下す。姿形こそ愛らしい少女だが、支配者のような冷徹な色と暴君のような威圧感を秘めていた。

大の大人でもこの童女に睨まれたら恐怖を覚えるだろう。

それだけの迫力を持つている童女の纏う空気を、少しも堪えた様子のない無表情で青年は見返す。

「無粋とはどちらのことだろうか？私をこんなところに監禁している人間の言葉とは到底思えないな。」

それどころか何処か小馬鹿にしたような冷たい嘲笑を浮かべる青年に、童女は一気に大きなアーモンド形の瞳を吊り上げた。

「どうやら自分の立場が分かってないようですね。」

一瞬間間見えた激情を、すっと冷たい色に染め上げ、童女は椅子から立ち上がる。そして椅子に立て掛けてあつた馬乗鞭を持って青年に近づいた。一步一步童女が歩を進めるたびに、狭い箱の中にヒールの音が跳ね回る。

「アタクシ、無駄なことは嫌いです。ですから一度だけ言いますわ。」

鞭の柄で青年の顎をくいを持ち上げると、口付けでもするかのような至近距離でそつと言葉を吐き出す。

「大人しく『魔具』を渡しなさい。そうすれば悪いようにはしませんわ。」

グツと鞭を持つ手に力が籠る。これを断つたら自分を叩くつもりなのだろう。幼いくせに歪んだ思考の娘だと痛む頭で青年は考えていた。

「…断る」

しかし迷いなき返答。それを聞くや否や仕方ないともいうように眉尻を下げて微笑んだかと思うと

ビシッ！！

青年の頬を一直線に灼熱が走る。次いでじりじりと焼けるような痛みを伴う感覚に、ミミズ腫れになってしまふなと胸中呟いた。

「出来損ないの『13番目』^{ドライツェン}には勿体無い手札^{カード}ですわ。あなたにはもつと似合いの手札があるでしょう?」

少なくとも、その手札ではない。そう言ってもう一度鞭を振り上げる。今度は額に当たった。

「その手札を使いこなせるのは、^{アリス}『A』であるこのアタクシ!」

ヒステリックに叫びながらまた鞭を振るう。胸に、大腿に、目の下に。

「…下らんな」

「なんですって…?」

愉悦に顔を歪ませていたアリスだったが、ふとドライツェンが呟いた言葉を拾い、怪訝そうに眉を寄せる。

「猿芝居も程々にしておくことだ、アリス。」

「何を…」

「本当にこの手札を欲しがっているのは『アリス』なのか、ということだよ。」

傷が痛み、気を抜ければ顔を歪めそうになるが、気力で無表情の仮面をつける。対してアリスも先ほどの狂気染みた色は顔を隠し、冷たい表情に戻っていた。

「どつという意味かしら。」

「簡単なことだ。この誘拐はどう考えても君一人では成立しないのだよ。」

冷たいだけの表情が、少しだけ動いた。それを確認するでもなくド

ライツェンは言葉を続ける。

「おそらく君は今日オークションを訪れるのは私とエミリオの二人だと思っていたのだろう。エミリオと私の二人だけなら事は簡単だった。オークションが始まると同時、エミリオを『恋人』^{チャーム}で操り私を攫ってしまった方がいい。しかし実際はアルシオとマリアもついてきてしまった。」

アリスはマリアがついてきたことに相当焦ったはずだ。少なくともドライツェンがマリアを一人にするはずがない。間違いなくオークションにまで連れて行くだろう。

体は弱いがマリアは優秀な僧侶だ。^{レシヨップ}マリアの至近距離で『魔具』などを使えば、『恋人』が発動する前に『抵抗』^{レシスト}されるのは目に見えるている。

「マリアがついてきた時点でオークションの最中に私を攫うのは不可能になった。つまり私を攫うチャンスは裏のオークションが始まる前になる。」

「……………」

「いや、正しくはマリアが『馬車』から出る前だ。あの馬車は動く結界。あの中に入っていれば外からの干渉は受けないが、外の状況も分からない。つまりあの馬車に入っている間はマリアも『魔具』の発動に気づけないということだ。」

種明かしのようにドライツェンが言葉を紡ぐと、最初のうちは静かだったアリスの表情に変化が見られた。頬が僅かに強張り、少しだけ血の気が失せたように見える。

「大方私が飲み物を買った際に『恋人』で干渉したのだろう。『恋人』の支配力は一度成功してしまえば絶対だからな。」

「…それで？」

「その後あたかも私を探しに行くかのように見せかけ、私を攫うようエミリオに『命令』した。が、またここで予想外のことが起こった。」

それがアルシオの存在だった。

怪しまれないよう馬車の中の二人に「ドライツェンを探してくる」と告げると、アルシオはマリアの存在を無視して「自分も探す」などと言い出した。それだけではない。アルシオは無意識にドライツェンが進んだ道筋を追っていたのだ。

『恋人』の支配力は確かに強いが、それでも目の届かないほど離れた位置からだとして、どうしても簡単な指示しか出せない。かといって目の届く位置に行くのはアルシオがいる以上憚られる。ゆえにアリスにはエミリオを孤立させることしか出来なかった。

後にアルシオはふらふらと歩き回り、馬車に戻る。実を言うと、ドライツェンがアリスの存在に気付いたのはこのときだった。

アルシオはエミリオと途中までは『一緒に』ドライツェンを探していたのだ。『魔具』はその力が強ければ強いほど『残り香』も強いものになる。『恋人』ほどの能力であれば、ただ隣にいるだけでも『残り香』がうつつてしまうのは想像に難くない。

「アルシオから話を聞いたとき君の計画は大方予想がついた。」
追い詰められたアリスが何をしでかすか分からないことが一番の不安だった。ゆえにドライツェンは『わざわざ』アリスに自分を『攫わせた』のだ。計画さえうまくいけばアリスは下手な行動に出ない。それは彼女の性格上間違いなかった。

このこのこ人気がない舞台裏に来たドライツェンをアリスか…いや、おそらくはエミリオが気絶させる。その後エミリオをアルシオたちの元に返したのだろう。アルシオの『残り香』にマリアが気付くのは時間の問題だ。だからあえてそうなる前にエミリオを返したのだろう。事態についていけないエミリオが未だ混乱気味の二人の元に行けば事態がさらに悪化して多少の時間稼ぎにはなる。それにしただって荒い作戦だった。

「皮肉なことだがアルシオの命令違反が君の計画を掻きまわしたらしいな。」

あのとときアルシオがついてくると言わなければ。マリアを連れて行くといわなければ。マリアを置いてドライツェンを探しに行かなければ。おそらく事態はアリスの筋書き通りだったのだろう。

…きつとドライツェンにとって最悪の事態に。

そう言つて目の前のアリスを見上げると、彼女は肩を揺らして暗く笑っていた。突然のことに流石にドライツェンは驚きを隠せない。

「…ふ、ふふ…大したものですね、その想像力…貴族を辞めて脚本家になつたら如何かしら。」

「何がおかしいのかね」

ドライツェンの言葉に、俯いて天幕のように垂れていた金髪を持ち上げながらアリスが笑う。人を見下しきつた嘲笑だった。

「貴方の言葉通りアタクシが貴方を攫つたとしましょう。でもその口ぶりではこの件はアタクシ一人で十分ではありませんの。」

言っていることが矛盾している…アリスはそう言いたいのだろう。確かにここまでならアリス一人でもなんらおかしくない。

アリスの嘲る表情に、やれやれといったように肩を軽く竦め、ドライツェンはアリスを見上げた。

「では逆に問うが…君は私をここまでどうやって運んできたのかね。」

「どつやって…普通に、馬車でですけど。」

「では『誰の』馬車に』どのように』私を乗せて、一体『誰が』操つたのかね。」

そこまで言つて聡明な妹は感づいたらしい。そうなのだ。ここが一

番の肝。

一つ。気絶したドライツェンをアリス一人で運び込めるわけがない。
一つ。アリスの小さい体で、そのドレスで馬車を操れるとは思えない。

一つ。まだ幼く、女の身であるアリスが個人の馬車を持っているとは考えにくい。

つまり、アリスには間違いなく馬車の提供者：共犯者がいるのだ。

そもそも疑問に思うべきなのだ。『恋人』の能力は確かに『魔具』の所有者には発動しないが、それでも十分すぎるほど強力だ。それなのにわざわざ危険を冒してまでドライツェンの『魔具』を狙うなど、どう考えても納得しがたい。アリスにはドライツェンを攫う『動機』がないのだ。

ここまでできて気付かないほどドライツェンも愚かではない。共犯者の正体は想像がついた。

「アリス…君が庇っている共犯者というのは…君の肉親。『アイニッ一番目』ではないか。」

マリアにとってのドライツェンに当たる人物。そしてドライツェンの腹違いの弟。

その名前をドライツェンが口にした途端、アリスの肩が跳ねた。アリスは顔を俯かせて、怯えたように両腕で自分の体を抱いていた。最初と体勢は変わってなく、どう見てもドライツェンのほうが追い

込まれているはずなのに、場を掌握しているのはドライツェンだった。

「確か：アインツの『魔具』は『聖杯^{カップ}』だったな…」
数ある『魔具』の中でも唯一の回復系。実質試合では持っていても何の意味もない…要は外れ札というわけだ。

「アインツには十分動機があるようだな。」
そう言っただけで見据えればアリスの小さな体がびくんと体が大きく跳ねる。才能が有っても所詮アリス自身はまだ11歳の女の子なのだ。震える体が細くて何だかこちらが加害者のような気分になってくる。こっちは拉致監禁されて鞭で打たれるのに理不尽だ。
アリスは心細そうにこちらを見上げ、真っ青な顔で唇を戦慄させる。嘔み締められて真っ白になったそれが震える声を上げた。

「ア、アタクシ…は…」

見ているこちらが可哀想になってくるほど怯えきった様子にドライツェンが口を開こうとした瞬間。

「何してるのかな？アリス…」

酷薄そうな声が室内に反響した。

ACT1 第五手（後書き）

えらく説明くさくなってすみません。文章力がほしい…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173h/>

跡取り物語

2010年10月9日22時11分発行